

フランクフルト日本人国際学校における中学部ホームステイ交流について

前フランクフルト日本人国際学校 教頭
北海道せたな町立瀬棚小学校 教頭 能 代 仁

キーワード：在外教育施設，ドイツ，国際交流

1. はじめに

教頭職として平成21年～24年3月までの3年間、フランクフルト日本人国際学校への赴任であった。本校は、ドイツの偉大な文豪ゲーテの母の墓所があったリープフラウエンシュレ校を間借りしてスタートした。ドイツはユーロ圏において、政治及び経済において中心的役割を担っているのは周知の事実である。1923年書物「汎・ヨーロッパ」の中でEUの前身であるヨーロッパ統一を提唱したのはクーデンホフ・カレルギー氏である。彼の母はクーデンホフ光子という日本人である。また歴史教科書でも紹介されている様に、明治政府は富国強兵政策の見本として当時のプロシアに使節団を派遣し、ドイツ文化を積極的に取り入れていった。日本が今日大きく発展した背景にはドイツの役割は計り知れなく重要であった。フランクフルト校の勤務3年目を迎えた平成23年度は日独交流150周年記念行事、なでしこJAPAN女子ワールドサッカー優勝と大変思い出深い年でもあった。日独交流の重要な一翼を担っている中学部1年生が、「小さな親善大使」となって行っているホームステイ交流について紹介したいと思う。

2. 現地校とのホームステイ交流

着任するにあたり学校要覧を見てみると、教育活動の目玉として長年取り組んでいる「ホームステイ交流」が紹介されている。平成21年度赴任当時は、3泊4日の日程で相互に受入を行う計画で行われた。

ペアリング調査に始まり、保護者の希望調査などその仕事量は相当なものがある。

(1) ホームステイの意義

ドイツに長年生活しているからといって、児童・生徒及びその家族がドイツ文化や生活様式等を良く理解しているとは限らない部分がある。事実、週末や連休・長期休業の際は、ドイツ周辺のヨーロッパ諸国へ家族旅行に出かけるケースが多い。自分たちが住む家の近所の方と挨拶する程度で、ドイツ人家庭に入り、寝食をともに過ごすことはごく稀である。フランクフルト日本人国際学校では、「ドイツの家庭生活や現地校での活動を通して異文化を体験し、それを理解し認めようとする態度を育てる。」ことを目的として教育課程の中に位置づけ、現地校とホームステイ交流を行うことにした。

ホームステイ交流を行う意義はとても深い。しかし、それぞれの家庭の事情を十分に考慮し、学校と家庭が連携を取り、この行事を進めていく必要がある。

基本的にドイツ人家庭の根源は「個人の意志」、日本人は「共通の経験」を大事にしていく傾向が強い。両者の考え方を十分考慮しマネジメントしていくよう配慮した。

(2) 国際交流ディレクター派遣制度

本校では平成15年度より文科省の「国際交流・文化交流推進校」の指定を受け平成24年3月までの間、3代9年間にわたって国際交流ディレクターが派遣されてきた。この



Treysa駅に迎えに来てくれたシュバルム校生徒
パートナーとの出会いに心ときめく瞬間！

期間中、国際交流の中心的役割を担い、ドイツ現地校交流及び校外学習マネジメントを行って頂いた。

(3) ホームステイ実施スケジュール (H21・H22年度)

ホームステイは国際交流ディレクター、中学部1年担任、中学部教師、ドイツ語教師、国際交流部、管理職を中心に計画・実施されていく。おおまかなスケジュールは以下の通りである。

- 4月 交流参加者数、生徒の個人情報（アレルギー、ペットの有無、趣味）調査
両校生徒のペアリング
学年会におけるホームステイ保護者説明会
両校担当者打ち合わせ会議（本校 会場）
- 5月 シュバルム・ギムナジウム校（以下 シュバルム校）への訪問 3泊4日
- 6月 本校においての向かい入れ交流（3泊4日）

(4) 生徒及び保護者が抱える悩みや期待

異文化の年頃の生徒との交流をするにあたり、生徒及び保護者は様々な悩みや期待感を持っている。

ア 相手校への訪問時の悩み

- ・過去に行った人の話を聞くと夜は簡単な毛布だけで寒くて寝られなかった。
- ・夜の食事は冷たく、粗食であったためお腹が空いた。（ドイツの夕食はKalt Essen カルトエッセンと呼ばれ簡単な食事を摂る習慣がある。）
- ・ドイツ語も英語もあまり話せないので、どんな風にコミュニケーションを取ったらいいのか心配。

イ 本校受入時の悩み

- ・どんな食事を出したらいいのか。（味噌汁や納豆など、普段食べているものを出して良いのだろうか？）
- ・どこに遊びに連れて行ってあげたら喜んでくれるのか

ウ 交流への期待

- ・ドイツ人と相互にホームステイ交流するのは、貴重な経験で多くのことを学べる。
- ・ドイツの人がどんな風に生活しているのか実際に見てみたい。

(5) 担当教師の奮闘

ホームステイ交流において、より重要な役割を担うのが中学部1年の担任教諭である。派遣2～3年目教諭であれば生活基盤、ドイツ語、現地実情等がある程度把握されているため、ホームステイ・プログラムをスムーズに運営することが可能である。しかし、毎年約1/3の教員が入れ替わる在外施設においては、特殊な勤務事情から必ずしも物事が計画通りに順調に運ばない面がある。派遣1年目で中学部1年の担任となった教師は、相手校教師と英語またはドイツ語で計画立案、保護者の悩み、生徒の悩み等々 膨大な量の仕事量に対応していく力が要求される。日本で経験豊富な教諭でさえ、帰宅時間が夜10時を過ぎてしまうことなど当たり前の事である。その為、特に中学部長を中心として中学部全職員の総力を挙げてサポートする必要がある。（自分が勤務した3年間は派遣1年目の教員がホームステイを担当。さまざまな苦難や問題を乗り越えながら計画・実施していく姿はとても立派であった。）

(6) 校内体制の整備

H21年度実施にあたり、生徒がシュバルム校ホストファミリーとのコミュニケーションがうまく取れなかったことから悩んでしまう事例があった。そこでH22年度よりドイツ語現地採用講師（女性）を出発時から同行し、悩み・相談などすぐに対処できる様にした。また身分もH23年度よりドイツ語一般非常勤講師からドイツ語科主任に命課することにより、積極的にホームステイ交流担当として計画立案に携わる様に改善を図った。

(7) H21, 22年度交流校 (シュバルム校)

シュバルム校は校種がギムナジウム校として設置されている。将来、大学に進学することを念頭にいた学校であり、10～18歳までの生徒が在学している。シュバルム校はフランクフルト市から北へ200kmほど離れた距離にありSバーンで約1時間30分ほどである。民芸品「シュバルム刺繍」や校区には函館五稜郭の様な堀がある。6月には「赤ずきんちゃん祭り・・・ザラート・キルメス」行進があり多くの観光客が訪れる。グリム童話の「赤ずきんちゃん物語」が生まれた地でもある。

(8) 派遣2年目 中学部1年に同行

本校では校外での学習・行事を行う場合、児童生徒の安全確保及び計画の進捗状況を把握することを目的として管理職1名が同行するシステムを採用している。H22年度の交流においては、国際交流ディレクター、中学部1年担任、ドイツ語教諭、そして自分の4名が引率した。自分以外の学校スタッフ3名もシュバルム校交流担当教諭宅にステイし、自分はシュバルム校から3kmほど離れたゲストハウスへ宿泊した。

(9) H22年度実施の様子 (本校ホームページより)

シュバルム校 (<http://www.schwalmgymnasium.de/>)

① 【シュバルム校訪問】

5月26日(水)～29日(土) 3泊4日の交流ホームステイ(訪問)を実施しました。本校(男子7名 女子13名 計20名) 相手校(男子11名 女子16名 計27名)がペアリングをし、パートナーの家に宿泊しながらシュバルム校にて合同学習や近郊施設見学をしました。

本校生徒の感想：

- 家が大きくてビックリしました。庭もバトミントンのコートがあつてさらにビックリ!!
- 夕食で出された食事の量が多くて、食べきれないで大変でした。
- 掛け毛布一枚で寝たのでちょっと寒かったです。○パウゼ用や昼食弁当を作ってくれ、とても良かったです。
- 「ウノゲーム」をして遊びました。ルールは日本と同じです。
- 日本の漫画が大好きなパートナーの部屋に本棚に、沢山漫画がありました。

5月26日(水) 受け入れパートナーとの交流を深めるリクレーション

誕生日順や靴の大きさ順での整列

(ドイツ校の先生は靴のサイズ規格に初めて気が付き、苦笑いでした。)

5月27日(木) 午前：7：30～地理・英語・美術・体育 合同授業

午後：ノイキルヘン町童話博物館、見晴らし施設見学

5月28日(金) クニユエル野生動物園見学

○イノシシ、フクロウ、シカ、山羊、馬などの動物見学、森林散策ゲーム、イメージ描写

○夕方：グリルアーベント

(バーベキューパーティー)

(本校保護者来校、パートナー保護者との顔合わせ及び交流)

5月29日(土) 8：40 駅集合

9：05 Treysa 発

10：45 中央駅着

11：15 学校解散



グリル・アーベントで家族ぐるみの交流を深める
両校関係者

②【本校受け入れ】

中学部1年が6月16日（水）～19日（土）の3泊4日の日程で、シュバルムギム校とのホームステイ交流（受入れ）を行っています。

・習字（友好の文字を清書）・美術（パートナーの似顔絵描き）・音楽（和太鼓）・家庭科（調理実習・・・パウゼ用の軽食作り）・追分ソーラン踊り ニッダパークウオークラリー（雨天のため中止→博物館見学に変更）

本日はグリルアーベント（夕食会）を行い、ホームステイパートナー家族との交流を深める予定です。

（10）過去の交流家族との出会い【5月26日（水）：宿泊先でのレストランでの出来事】

夜9時過ぎ、ゲストハウス1階にある食堂でコーヒーを飲み而降りてみると、ドイツ人夫婦と娘さんが遅い夕食を取っていた。しばらくするとゲストハウスのマスターが日本人の自分をその家族（父：職業ホームドクター・母・長女）に紹介してくれた。しばらく片言のドイツ語で会話をしていると奥さんは、以前に日本人学校生徒を受け入れた経験を丁寧に話してくれた。現在19歳になる次女は、8年前に本校生徒とパートナーを組んだとのこと。

「日本の子どもがホームステイにやって来た時は、食文化が異なりため何を食べさせたら良いのか？どんな風にして対応して良いかととても迷いました。文化の異なる子どもを受け入れることは、全てが驚きでした。でも今でもその時のことが貴重な経験となっています。このプログラムはとても良い企画で本当に素晴らしい」とお母さんは話されていた。2日後には父がシュバルム地区の四季を撮影した美しい写真集を頂いた。

2週間後、Salatkirmes（ザラートキルメス）祭を見物した後、お礼をするためハイル氏の自宅を訪ねるとホームステイを体験された次女に会うことができた。

19才次女の思い出：（日本人学校に）訪問した時「スイカ割りゲームがとても楽しかったです。パートナーとはブリクラも一緒に撮り、作ってもらった折り鶴は今でも大事に持っています。」と話してくれた。



交流体験の素晴らしさを丁寧に説明してくれた
ハイル家族（ゲストハウスにて）

5. 最後に

H24年度は前年度の反省を活かし、小学部5、6年が交流しているハインリッヒ・ハイネ校とのホームステイ交流に変更した。日独交流150周年記念イベントとして行われたハウプトバッハ広場では故郷北海道で人気の「ヨサコイ・ソーラン踊り」が披露された。両校の生徒が鳴子を持って元気に踊る姿を温かく見つめる両校の家族があった。その光景を見た時、深夜まで残って交流を成功させようと奮闘する本校職員やいろいろ悩み受け入れて頂いた保護者協力に感謝せずにはいられなかった。

この素晴らしい取り組みがいつまでも継続され、未来の両国の親善交流の架け橋となってくれることを期待したい。



2011年11月4日（土）

ヨサコイソーラン踊りを披露する両校生徒

<http://www.youtube.com/watch?v=fPLqfBnDXNY>